

母は他人にも、自分に対しても正直だった。他人には多くを求めず、自分に厳しかった。自分の足りない所をどう補えばいいのかと常に考え、日記を書き続けた。それは夫への愛と神への信仰の告白でもあった。

話はまた外れるが、私が初めてのスペインからの旅から帰ってきた時、私の壁に銀星章が飾られていた。「父ちゃんありがとう、これが火祭りの日にとってくれた星なの」とバレンシアのことを思い出して聞いた。「父ちゃん取りそこなってしまうけど、いいお友達がトロちゃんに送ってきてくれたのだよ」と父は答えた。母の幼馴染の恋人だった毅伍長の勲章を誇らしげに子の寝室に飾る雅量を父はもっていた。

このことについてもう一つ付け加えなければならない。私が幼稚園在学中のことだ。マックスが倒産し、農園を買ってくれと頼んできた。あの生意気な素振りはすべて消え去り、祖父にペコペコ頭を下げていた。農園を手に入れた後、私たち一家点検に行った。小さな家が立っていた。母はタケちゃんがいた時のことを懐かしがって、初めて私の壁に飾っている銀星賞はタケちゃんからだと教えてくれた。その次農園を訪問したとき、私が銀星賞をタケちゃんの部屋の壁にかけておくと、母はタケちゃんの敵討ちはこれで終わった、と大満足だった。こうして前の松本農園が私たちの農場の一部になると、水利が改良され、土が蘇り、再び豊穡な作物を生産するようになった。母はタケちゃんの家の方に家族専用の野菜畑を作り、大根など稀な野菜を植えた。アメリカでは珍しい大根がサラダの一部となり、大根おろしが私たちの食膳を飾るようになった。

私は八月二九日に生まれた。父母も祖父も大喜びだった。物心がついたころ、時々母が落ちついていないのを見かけた。後でわかったことだが、私が満二つになったのを機に、母は妊娠しようと心掛けていた。愛する夫のために彼の子を産みたかったからだ。しかし、いくら努力しても妊娠しない。彼女の健康に異常はなく、妊娠を拒む要素は一切なかった。父はというと、父親も兄も子持ちで、子供は計画しなくても自然に出来るものだとしか考えていなかった。だがいざ、医者に見てもらおうと不妊の原因は父にあった。閉塞性無精子症と言うもので、幼少時にうけた外鼠径ヘルニア手術の際の医者の不手際が原因だった。スタンフォード、ロスアンジェルスなどの医学部の先生に見てもらったが復旧は不可能だった。父母がどれほど失望したか、今二人の子の父となった私にはよくわかる。その時まだ幼かった私は何も知らずに父母の寵愛を集めていた。

前に母の遺書と述べたが、私の生みの父親は誰かという手紙はこの時点で既に書かれていた。すべてを正直に述べる父母は何時かその事実を私に伝えなければいけないと常に心掛けていた。それが延び延びになったのは主に武彦個人と武田家への顧慮だった。少年時代の私は直情径行だった。仮にその時点で私に事実が知らされたら、私はすぐさま東京に飛び、武彦の前に現れて名乗りを上げたに違いない。それが格式を重んじる学習院の研究室で行われたとすれば、武彦は居たたまれなくなってしまふ。私とナンシーが婚約を結んだ時、母はこれを機会に私たち二人に一

切を語ろうとした。ちょうどその時、ホノルルに国際赤十字の会合があって、日本から武田幸子理事が参加していることが地方紙にのっていた。私たちが武彦に会おうとすれば、それは幸子にとっては迷惑千万、母は急に幸子が気の毒になって、とりやめた。

母の心境は次の日記の記述によく表されている。アメリカが独立二〇〇年祭でわきたっていた時だった。

一九七六年七月一日ヘレン伯母さんがなくなった。あたしを可愛がり、心から愛してくださった伯母だった。「二〇年後に後悔するようなことはしないように」というあの忠告をよく思い出す。あの忠告がなければ、あたしは墮胎という罪を犯した。そしてその行為があたし自身を一生苦しめることになるのに気がついていなかった。伯母さんは自分の子供を持たず、妊娠の経験もなければ、墮胎の経験は勿論ない。あたしには「後悔するようなことはしないで」といっただけで、あたしを導いてくださった。アルトーロは今年二三歳になる。彼のいない生活は考えられない。ヘレン伯母様有難う。時々武彦のことを思い出し、アルトーロは生きていますよ、と言ってあげたい。しかし、彼をおろせと言った人間にはあたしの気持ちは理解できないだろう。それに幸子が気の毒だ。

日記帳の一番後のページに封筒が貼っていた。「アルトーロに、死後に開けること」と書かれた母の遺書だ。内容は日記と多少重複するが、ここに収録しておこう。

いとしいアルトーロ

この手紙を書き始めて、あなたが生まれた日のことを思い出し、トロちゃんとお書こうかと思ったぐらいでした。かわいらしい赤ちゃんだったこと。子供というのは神様のみ恵み、こんなに素晴らしい贈り物はほかにありません。あなたはもうすっかり立派な大人になってしまいましたが、あの日の喜びほど素晴らしい経験はなかったのですよ。トロちゃんが生まれた後すべての日々をお父さんもお母さんも、そしてお祖父さんも感謝の気持ちで迎え、トロちゃんの毎日を楽しみ、トロちゃんの成長を誇りにしていました。

もしどこかに悔みがあるとすれば、トロちゃんが生まれた時お祖母さんがすでに亡くなっていて、トロちゃんがお祖母さんに会えなかったことです。お祖母さんは四三歳という若い年に乳癌で亡くなりました。お母さんは今その年になって、幸い癌の兆候はないものの、体質としてその危険があるし、何時そのような病に

襲われて命を落とすことがあるかも知れません。それで今この手紙を書いています。正直のところ、一〇年前、同じ誕生日に、そしてトロちゃんが三つになった時にも同じような手紙を書きました。その二つの手紙はもう破って捨ててしまいましたが、始めの手紙の書き出しはトロちゃんでした。その気持ちがこの三番目の手紙にも伝わっています。

日記を読んだらわかるでしょう。あたしの一生を通じてトロちゃんに一つだけの隠し事がありました。あなたの生みの親は武田武彦という日本の方です。お父さんにはすべて話しています。あたしが亡くなったらお父さんも隠さずにそのことを話して下さい。

どうしてお母さんが武彦さんに肌を許したのか、若気の至りだったからでしょうか。お母さんにはタケちゃんという幼友達がいて、そのタケちゃんへの思いを転化させたのかも知れません。ただお父さんとの間にほかの子供ができず、武彦さんのおかげでこのように立派な息子がいるのだ、とお父さんが言います。武彦さんに感謝してもいい、と仰るのです。お父さんは心からトロちゃんを愛し、誇りにしています。他所の人たちは彼があなたの生みの親ではないことに気が付かないのです。だってスペイン人と日本人は容貌の点で似通っているからでしょう。

このことを早く明かさなさい。何時トロちゃんがこの手紙を読むかしら。それまであたしは健康に気を付けて、神様が許して下さいの限り、お父さんとトロちゃんと一緒にいつまでも神様のみ恵みを楽しみましょう。

最大の愛情をこめて、母

一九七三年五月五日

日本では端午の節句ですね。あたしは常に、この日をトロちゃんの日だと思っています。

日記では武彦が私をおろせと行ったことで、彼に対する不満が述べられているが、遺書にはその片鱗はなく、むしろ私の生みの父に対する感謝の気持ちが素直に表現されている。母は愛情に満ちた立派な女性だった。遺書で懸念していた様に、母は癌を患ったが、現代医学のおかげで、二〇〇五年迄命を保ち、一家の支えとなっていた。

話は全く前後してしまっただが、父は一九五三年の五月にスタンフォードからMBAを授与された。妊娠している妻を抱えていたので、スペインに帰ることは据え置きとなり、祖父の求めに応じてベンチュラ農場経営の手助けをした。この婿は祖父の大のお気に入りとなり、祖父は彼を共同経営者の地位に付け、農場の名をトンプソン・アンド・ドンカルロスと改め、永住を薦めた。スペイン側の祖父母は父が次男坊だったので、異存はなかった。私のほかに子供が出来なかったと言うこと以外には、何一つ欠けることのない生活を父母は送っていた。